

パリジャンではないフランス人の男の魅力を教えてくれる俳優

出演作が相次いで公開される **リシャール・ボーランジエ**

映画のストーリーとか、言わんとしていることはもうどっちでもいい。その好きな俳優が出ているシーンをただ見ているだけで、映画を見る喜びそのものを感じさせてくれる、そんな俳優。

それは、リシャール・ボーランジエだ。フランスというのは本来農業の国で、彼が演じて一番うまい

いるだけで1時間半や2時間つぶしている甲斐がある、そういう魅力が彼は持っている。最初の印象ではロバート・デ・ニエロと比べてどうなんだろう、と思った。

僕はやはりこういうタイプのフランス人の俳優の映画を楽しめる余裕なり、気持ちの遊びが、日本の観客にないとしたら残念だと思う。

フランス映画の持っている一番の良さのひとつは、決してエキセントリックではなく、何げない「日常」を丁寧に積み重ね描いていく中で、人間にとって大切な何かを表していくところにあるのではないだろうか。そういう映画にこそふさわしい、

いやそれを演じることのできる代表的な俳優が彼だと思ふ。

例えば今度公開になる主演作『フランスの友だち』では、脱走兵役の彼が、泣いている幼い男の子を慰め抱いてあげるシーンがあるけれど、そこに滲み出る優しさは本当に魅力的だった。彼の自伝的エッセイがすでにフランスで出ていて、それを読んだ時「人生よ、お前の中にもっと潜りたい」という言葉に出会い、非常に心動かされた。それは、人が生きていく上で誰もが直面する苦悩に対して、どこかでいつも逃げている自分に抱く焦燥のようなものを実感的確に表現していると思えたからだ。彼は今年49歳になったのだが、

実は68年から78年頃までは酒やドラッグでメチャクチャだったらしい。そんな彼のこの言葉にこそ、僕は本当に共感を覚えるのだ。

フランス映画というとか難解なものという先入観が一般にあるけれど、それを取り払うためにも注目してほしい俳優である。

(談)

●山本肇司(ラッシュン・デザイナー) 公開及び公開予定出演作品 『エレベーターを降りて左』(公開中・東銀座松竹セントラル3) 『コックと泥棒、その妻と愛人』(8月4日より渋谷シネマライズ) 『フランスの友だち』(8月11日より渋谷ル・シネマ1)